

Okayajin (岡谷人) Magazine

This magazine was issued in November 11, 1963 (one year before Tokyo Olympic). I, Tetsuji Oguchi, was a freshman of [Tokyo metropolitan Aoyama high school](#) (東京都立青山高校).

In summer vacation, I visited and stayed at city of Okaya (岡谷) beside Lake Suwa (諏訪湖), Nagano prefecture (長野県), central Japan, where Oguchi family was living for a long time manufacturing and exporting silk and still keeping a spacious home and land well maintained.

Participants in this topic

Naomichi Nishikimi (錦見尚道)

ボク、An 8 year old boy who lost the way to home back, my cousin

Fusako Moriya (守屋房子)

Author and a staff of Okaya Shimin Shimbun newspaper (岡谷市民新聞社) who found a bewildered boy, Naomichi

Shigeko Oguchi (小口栄子)

My honorable grandmother who handed her own business card to Naomichi prepared for fatal occasions

Miyo-chan (美代)

A daughter of Okaya Shimin Shimbun president who brought Naomichi back home riding on motorcycle

Tetsuji Oguchi (小口哲司)

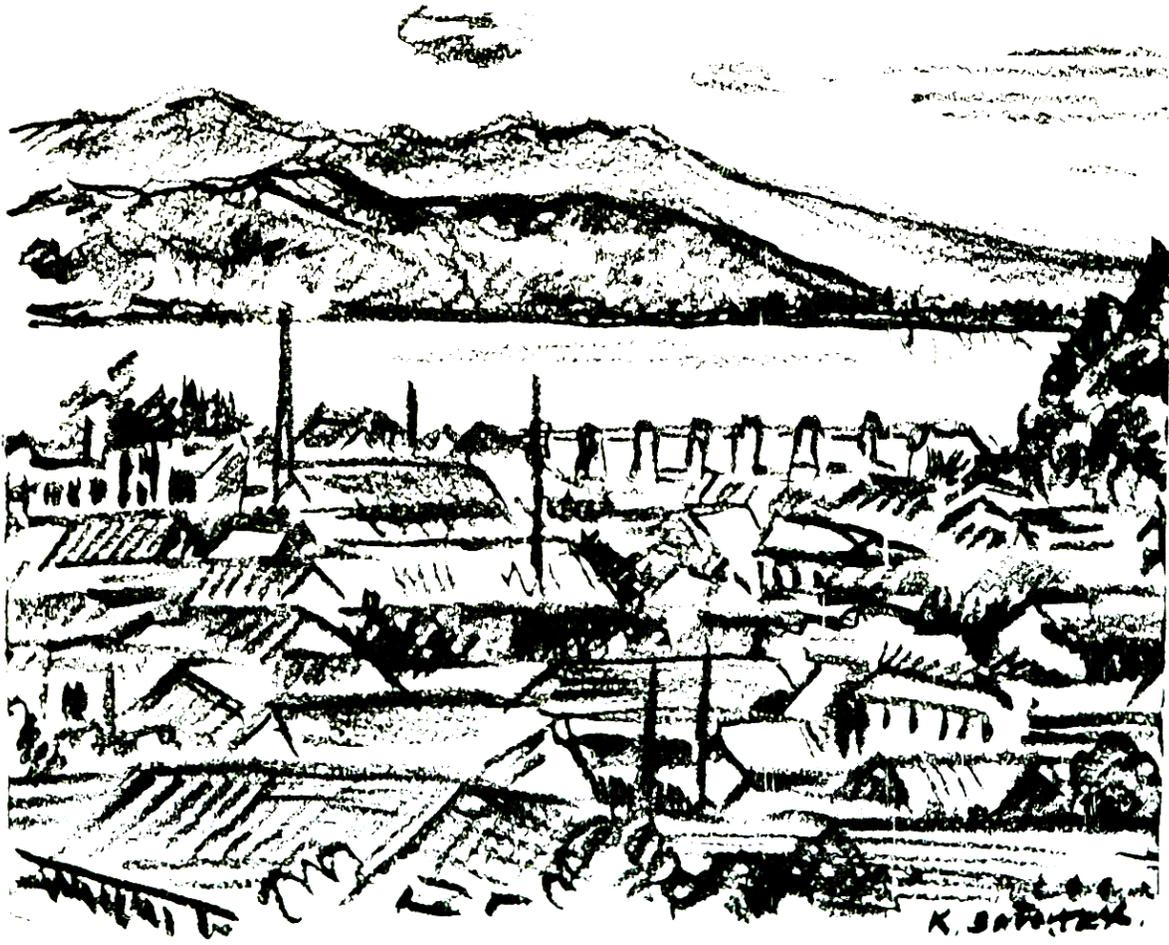
お兄さん、A wicked high school freshman who let Naomichi bewildered

昭和三十八年十一月十日印刷
昭和三十八年十一月十日發行

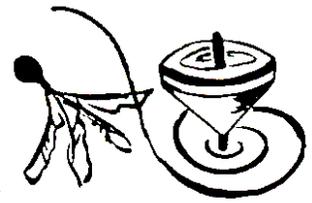
岡谷人

岡谷人

創刊号



岡谷人發行所



通りすがりの子どもとして見のがしてしまふには、あまりにも惜しい、すつかり私の心を奪つた男の子。

お盆の十六日夕、送り火を焚こうと外へ出たら、遊び疲れて家路を急ぐ足どりとはい違ふ、スタコラスタコラ歩いては来るけれど、何か物思いに沈んだような面持ち。そして眉毛のところにもちよこんとはられたバンソコウがその姿をいつそういじらしいものにしていた。

「坊や目のところ何したの？」と思わず声をかけた。男の子は一瞬ためらつたようだったが、

「ここねえ、ガラスでケガしちやつた。」

「そう、あぶなかつたね、目でなくて良かったね、痛い？」と私はたたみこむように話しかけた。男の子はそれには「うゝん」と答えただけ。そしてこんどは男の子の方からたゞみこむように私に聞いて来た。

「ねえ中央通りへ行くには、どこへ行けばいいの？」と胸のポケットからサツト名刺を出して見せた。私は、「あゝそうなのか」とすぐうなずけた。男の子の話はこうだつた。

照光寺の上へ墓地を買つたからお兄さんとそれを見に来たが、途中でお兄さんをなくしてしまつた。

それでボク中央通りへ出れば家へ帰れるんだが——年を聞けば八才というが、実にものわかりのいい子。

それより先ず私を感動させたのは名刺だつた。名刺には「小口栄子」（筆者注）小口さんは元岡谷市連婦会長）

と印刷され、住所、電話番号はもちろん、そして錦見尚道（にしきみ・なおみち）とちやんと書きこんであつたことだつた。この錦見尚道君がボクで、中央通りを探すのに苦労しているのだ。

私はこの子を一人で帰すには忍びず、新聞社へ電話をして小口さんの家を聞いたが、誰もいなくてとんと要領得ず、電話口に出た美代ちやんが「家がわかれば私が送り届けてやる」との事。ホツと救われたが小口さんの家がわからない。聞けばかなり長い事迷つていたようなので、私は思い切つて小口さんの家へ電話して事の次第を話し、お宅はどの辺でしようかとお聞きしたら、すぐわかつた。「坊やを連れて行くのは新聞社の社長の娘さんですからご心配なさいませぬよう」に申添えて受話機をおいたところへ、美代ちやんがバイクで来てくれた。

尚道君はがぜん元氣百倍、バイクの後ろに乗つかつて何事もなかつたような顔。

「お兄さんは高校生だもの、一人で帰れるよ」と、ちらつと見せた笑顔。送り火をたくのも忘れてバイクの残して行つたほこりを、いつまでもいつまでも私は見ている。

あの子の面影とともに、家庭教育の大切さが脳裡にしっかりと焼きつけられた。

（岡谷市民新聞社勤務・本誌同人）